Ⅰ　「帰らぬ人」(妻ゆえに)　トーマス・ハーディ（英） 1891年

岩波文庫 「ハーディ短編集」　井出弘之　訳

英仏海峡をのぞむヘイブンプールの港町にはセント・ジェイムズ教会がある。きょうは1月のうっとうしい雲が垂れこめていた。久しぶりに航海から戻ってきたシェイドラック・ジョリフ船長は、無事の帰港への感謝の気持ちから今日のミサに参加し、祭壇の前にぬかづいた。その帰り道に、エミリー・ハニングという背の低い、文房具屋の娘とジョアンナ・フィパードという背の高い娘があるいていて、それに追いついた。二人は親友で彼とも馴染みだった。彼が二人に挨拶すると二人もそれに答えた。以後三人は、よく会話することが多くなったが、当然に互いに結婚相手の候補として考えるようになった。彼はエミリーの店に入っていって雑談をしたり、また別では道でジョアンナにあって話し込んだりした。彼はどうやらジョアンナに傾斜しているようで、そんなことが町の噂になっていた。エミリーはそのことで落胆していた。といってもエミリーは心底彼シェイドラックを愛していたわけではなく、それに自分はこんな彼よりももっと地位の高い男と結ばれるだろうとの自負もあった。一方、ジョアンナはエミリーとの友情から、いつでもこの男に拒絶状を出す用意はあると、それを持ち歩いていた。ある日、ジョアンナはいつものエミリーとの気安さから、エミリーの店にいき、独りで品物を探しがてら店の仕事もしていた。そこへ彼がやってきた。ジョアンナはいそいでカーテンの陰に隠れた。彼はエミリーにそぞろに意中をさぐるような会話をしだしたが、エミリーはすねたようにものを言った。すると彼はそれに過剰反応をし、「愛しているのは君だけ、ジョアンナとは別れる」と明言した。二人は抱擁とキスをくりかえした。これを図らずも陰で聞いていたジョアンナはメラメラと嫉妬の焔が燃え上がった。

ジョアンナは客間からこっそり廊下に出て、勝手口から往来に出て行った。その後彼はジョアンナに別れの手紙を書いた。だがジョアンナは決してこれであきらめなかった。ある晩の町の公会堂からの帰り道で、ジョアンナはあの手紙の真意をたしかめた。すると彼はジョアンナに、君への気持ちは変らないと明言し、こんどはエミリーにそのことを伝えた。

ジョアンナと結婚して数か月後、彼女の母親が亡くなったので、二人は将来のことを考え食品雑貨店を開いた。やがてジョージとジムが生まれた。単調で、裕福でない生活が続いていく中で、ジョアンナは、よくエミリーの生活を想っていた。エミリーはその後、ちょっと裕福な町の商人と結婚し、ちょうどジョアンナの雑貨店の前に瀟洒な家を構えて住んでいた。彼らにも二人の子供がいて家庭教師が雇われていて、ジョアンナには不運と思わざるを得なかった。ところで夫のシェイドラックだが、彼女の胸中を知ってのことだが、もっと稼ぎを多くしたいと考え、妻に元の船乗り稼業をやってみたいと切り出した。彼らは夢を膨らませ、そしてそれを実行に移した。ジョリフは資金を調達し船を所有した。そして心晴々と港を出ていった。残されたジョアンナは寂しさをおぼえたが、希望がそれに優っていた。彼は予定の時期から1か月おくれて無事帰ってきた。稼ぎは300ポンド。しばらくその幸せに酔うことができ向かいのエミリーへの対抗心を満足させていた。だが、彼女はこれで収まらなかった。息子二人も船乗りにしたいと考えた。危険はあるが、それよりも”夢”が勝っていった。躊躇を繰りかえしてのち夫も賛成した。一家は、ほぼ全ての資産を投じ、船に商品を積み、ニューファンドランドに向けて船出した。

その後、ジョアンナはつらかった。前回にはない空虚感だった、息子が書き物机の斜め板に白墨で書いた「行ってくるよ、母さん」を見るたびに心が締めつけられる思いがした。彼女は「行ってしまった、あたしのせいで」と思い、泣き崩れた。だが、向かいの家を見るたびに自分をとりもどそうとした。真実、エミリーの家の経済事情は、彼女が思うほど自分らと差はなかった。が、彼女にはもうそういう思いがこびりついていたのだ。

最初の夏がすぎた。エミリーがよくジョアンナの店で物を買ってくれるが、それはジョアンナには、ほとんど施しに近いものにしか思えなかった。冬が深まっていく。いつしかジョアンナはエミリーに向かって、ひがみからくる辛辣な言葉を投げることが多くなった。「わたしが行かせるようにもっていったのよ！」、**「いつまでもうだつのあがらないうちの暮らしに我慢がならなかったのよ、あんたのとこはたいそう裕福で、景気がいいのに、ね！　さあ、はっきり言ったわ。どうぞあたしを憎むなりなんなりして！」**　同　p124

彼女は暖炉のそばで、烈風のたびにぞくっとして身をおののかせた。彼女は夫が出発前のことばを思い出していた。――無事帰ってきたときには、教会の内陣の階段のところで心から感謝をささげたい――彼女は、二十年前に彼が航海から帰ってきて、教会の同じ場所で祈っていた姿を思い出すことができた。彼女には、教会のその場所で、三人の姿がみえるのだった。予定の日々からすでに何か月も過ぎていた。彼女はときどき水平線上にジョアンナ号のマインマストが見える。ただし、それは幻ではあったが。　もう雑貨店は何もしていない。ジョアンナにはもはや生活の基盤は亡くなっていた。エミリーはできる限りジョアンナに力を貸そうとるが、ジョアンナはそれを拒否する。一緒に住もうといっても、三人が帰ってきたとき自分がいなければたいへんだという。だが、最後にはエミリーの誘いに従い、エミリーの家の3階に住まいすることになった。

ジョアンナ号が出帆して6年、12月のある湿っぽい夜のこと。向かいの自分の店の戸をたたく音がしたので、ジョアンナはたちまち通りをわたり、店頭にいった。だが人影はなかった。彼女は「3人」が夜分だから、今や変わっている主人のところで世話になっているのかもと思い、偶々店の主人が窓から顔を出したので、彼女は「誰かきませんでしたか？」と訊いた。主人は「おやまあ、ジョリフのおかみさん、あなたとは存じませんでした」、「いいえ、どなたもお見えになりませんよ」と答えた。同　p130

Ⅱ 「異邦人」（カミュ　仏）　1942年

『きょう、ママンが死んだ。』――アルジェリアの海岸ベリの町マランゴの貿易事務所ではたらく私(ムルソー)は、2キロ離れた施設に入所している母が亡くなった旨の電報を受け、その葬儀に参列するためバスで出かけていった。葬儀は院長と看護師と母の友人と私の4人だけで執り行われた。野辺の送りでは夏の強い日差しのため大変な疲れをおぼえた。翌日私が、海水浴をしていると、海の中で以前から良く知っている、少し好意を寄せていたマリー・カルドナとはちあわせをした。ブイにつかまって遊んだり甲羅干しをしたりして遊んだが、彼女は母を昨日亡くした私がいまこうして海水浴をしているのを知り、少し怪訝な表情をした。

葬儀が終わるとまたいつもの生活だ。職場ではエマニュエルの軽口をきくし、アパートでは同じ階のサラマノ老人と出会う。犬がやかましいのが困りものだ。またレイモンという会社員がいるが、情婦のことで時々派手な喧嘩をし彼が怪我をする。ある日、彼は女房に仕返しをしたいのでおびき出す手紙を書いてくれと私に頼んできた。馬鹿馬鹿しいが書いてやった。

一週間がたってマリーがきたとき、レイモンの部屋でまた喧嘩が始まった。警察までくるほどだった。興ざめしたマリーは怒って帰っていった。レイモンはそれを気にして、今度アルジェ近くの自分の友人の家へ遊びに行こうと誘ってくれた。そしてそう遊んだのだが、その帰り道、レイモンの情婦の兄を含むアラビア人の一団につきまとわれた。そんな日が続いたので、レイモンは用心用にとしてピストルを私に渡した。太陽がじりじりと照りつけていた日、強烈な光の差し込みに心身ともに疲れを覚えていた私は、岩陰の後ろの涼しげな空間に入ると、あろうことか例のアラビア人も同じくそこにいた。彼は驚いた表情で、私に刃物をちらつかせ、ついに刃物で突きかかってくる素振りだった。私は咄嗟にそのピストルを1発、そのあとに4発撃ってしまった。

裁判のための予審判事の取調べで私は、1発目を撃ったあと、さらに4発も撃った理由を問われたが、私がわからないと答えると予審判事は不機嫌になった。また、犯行時、感情を抑えていたかの問いに「それは言えない。うそだ」と答えると、呆れた顔をした。

判事も検事も、私が悔悛の情を見せると思っていたのが裏切られ、まるで無信論者のような答え方にてこずっていた。判事が「あなたは神を信じますか？」の問いに、私が信じないと答えると憤然とした。「自分の行為を悔いているか」の問いに、私は少し考えた末、実のところ悔恨よりもむしろ、ある倦怠を感じていると答えた。

次の公判時、弁護士と検事が弁論していたが、所詮は私の頭上で展開されていた。検事は私に、「予謀」があったと証明したがっていた。つまり「凶悪なる魂の持ち主」としようとしたのだ。母親の葬儀で涙を見せなかったこと、埋葬が終わると足早に去っていったこと。また葬儀の翌日に私が海水浴をしマリーといっしょにフェルナンデスの喜劇映画を見、そのままマリーといっしょに寝たこと、それに死んだ母親の齢も不確かだったこと、などから、私が全く人間味を持たない最低の人物だという印象をあたえた。アパートの隣人たちの「良い」証言もことごとく無視され、私の犯行は、被害者への執拗な殺害意思によるものだとなっていった。最後の審問で私が反論すると、検事は「では、どうして撃ったのです？」と質問してきた。私が「それは太陽のせいです」と答えると、廷内でどっと笑いが起きた。検事は、私のことを、魂というものは一かけらもない人間だと結論づけた。判決は、公開の場での斬首となった。頼みもしないのに教誨師がやってきて、神の裁きについて滔々としゃべりまくった。私は腹が立って司祭を怒鳴り散らした。私は精魂尽き果てて一度眠りについた。顔の上に星々の光を感じて目をさました。私は母親のことを思った。――**『ママンはあそこで解放を感じ、まったく生き返るのを感じたに違いなかった。――そして、私もまた、全く生きかえったような思いがしている。あの大きな憤怒が、私の罪を洗い清め、希望をすべて空にしてしまったかのように、このしるしと星々とに満ちた夜を前にして、私ははじめて、世界の優しい無関心に、心ひらいた。これほど世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のように感じると、私は、自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った。――』** 新潮文庫　窪田啓作訳　p130　私に残された望みは、処刑場の人々が罵声を浴びせながら私を迎えることだけだった。

Ⅲ「ほら吹き男爵の冒険」　ビュルガー　(独)編　1788年

岩波文庫　新井皓士　訳

18世紀、ドイツに実在したミュンヒハウゼン男爵が周囲に話したほら話、あるいは男爵とは無関係に世間で語られていた小話が、まとめられて出来上がったもの。

① 男爵は、狩猟や戦さに加えて、水陸にわたって、世界中から、果ては月世界旅行もします。その間のいろいろな話はおおよそありえない奇想天外なことばかりで、笑いの連続です。あるとき、ポーランドの森を歩いていたとき。熊に襲われそうになりました。持っていた二つの火打石を大口をあ

けて食らいつこうする熊に向かって投げつけると、**石は喉の奥まで達したようで熊はまずいと思ったのか身を反転させて逃げていきました。そこで今度は残る一個を熊の尻の穴をめがけて投げつけますと、石はうまく入り込み、腹中でもう一つの石とかち合って火花を発し、すさまじい轟音もろとも熊を爆発させました。** 同 p40

② 男爵は、ﾛｼｱの宮廷につかえて以降、対ﾄﾙｺ戦線を皮切りに方々へ出征していきました。ある戦線でのこと、――敵の要塞を攻撃しようにも、要塞の前哨、警戒網、防御施設を突破しようにもそれがわからないので、総司令官の期待を察して、男爵はいっそのこと敵陣に入ろうと、一番でかい大砲から出る砲弾に乗りましたが、砲弾が空中にさしかかったとき、「おっと、行きはよいが帰りはどうしようか」と思案しました。そこでたまたま敵陣から発せられた砲弾が、**『ﾜｶﾞそば数ﾌｨｰﾄに飛来したる好機をとらえ、ひらりと彼我の砲弾を乗り替えた。用件は達せられなんだが、ぶじ懐しい味方のもとへ帰ったのであった。』** 同 p67

③ ｼﾞﾌﾞﾗﾙﾀﾙ攻防戦(米独立戦争を支援する仏と西軍が英の防衛するｼﾞﾌﾞﾗﾙﾀﾙを攻撃)のとき、男爵は、敵の砲弾を自軍の砲弾で迎え撃つ手柄をたてたことで、ｴﾘｵｯﾄ将軍に感謝された。 同 p150、151

④ 海の冒険でのこと、船長ﾌｨｯﾌﾟｽの友人として北洋探検にでかけたときの話――氷山に二頭の熊がいたので、狩りの目的でそこ降り立ち、銃をぶっ放した。するとその音に驚いた周囲の氷山の白熊たちが大勢やってきた。男爵はその大群の押し寄せをしのぐために、さっき仕留めた熊の毛皮をさっと剥ぎ取り、それを着込んだ。すると熊が自分を信じておとなしくしてくれた。そこで男爵はこの隙をついて熊全員をﾅｲﾌで仕留めた。その肉と毛皮をﾛﾝﾄﾞﾝにもって帰って市長に、ﾛｼｱには女帝のところに献上した。女帝からは宸筆で礼状をいただいた。同 p179～186 というお話。

⑤ かつてﾀﾋﾁを出港して千ﾏｲﾙ雲の上を航行し、やがて月に到着した。頭が三つあるﾊｹﾞﾀｶやそれに乗る巨人がいた。住民は高齢になると死去することなく空中で解体し雲散霧消する。頭は右の小脇に抱えていて、旅行や激しい仕事のときは頭を家に残しておくことにしている。同 p197

⑥ このほかに、ｼｼﾘｰ島のｴﾄﾅ山の火口に跳びこんだことがあったが、地底のそこで、鍛冶の神さまｳﾞﾙｶｰﾝがいてやけどの薬をくれたり、美の神ﾋﾞｰﾅｽを紹介してくれたが、ﾋﾞｰﾅｽと長くいるうちにｳﾞﾙｶｰﾝが嫉妬して男爵を地の底に叩きつけた。そしたら地球の中心を突きぬけて南太平洋に出ていて、同 p212 大洋を泳いでいるうちにｵﾗﾝﾀﾞ船に助けられたのちﾁｰｽﾞでできたﾁｰｽﾞ島を経て、大魚に呑み込まれ、地底を抜けたところで気づいたらｶｽﾋﾟ海に帰ってきていた。そこからやっとﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞの宮廷にもどることができた、というもの。――「機会あらばまたお話ししましょう」と男爵はう」と男爵は言いました。いずれも大法螺ばかりです。

Ⅳ 「犬を連れた奥さん」 ﾁｪｰﾎﾌ(露) 1899年

岩波文庫 神西 清 訳

ﾄﾞﾐｰﾄﾘｰ･ﾄﾞﾐｰﾄﾘﾁ･ｸﾞｰﾛﾌが、ｸﾘﾐｱ半島のﾔﾙﾀにきて2週間になる。海岸通りのｳﾞｪﾙﾈ喫茶店で小粋なﾌﾞﾛﾝﾄﾞの、ﾍﾞﾚ帽をかぶった、ｽﾋﾟｯﾂ犬を連れた若い奥さんをみかけた。その人は彼の座席に近づいてきて、彼の隣に腰かけた。ｸﾞｰﾛﾌは40歳くらいの銀行員で、12歳の娘と中学生の息子がいるが、妻とはいわゆる倦怠期にさしかかっていた。その女性はどうやら人妻ながら当地では独りのようだった。彼は子犬を相手にする方法で、彼女から声をかけてもらうことに成功した。彼女はここにきて5日目だが、ここには1ヶ月ほど逗留するつもりだった。彼女について彼は、細っそりしたか細弱(かよ)わそうな首筋や美しい灰色の目を思い浮かべながら1週間がたった。ｸﾞｰﾛﾌは予想された散歩時に彼女を待ち喫茶店でｼﾛｯﾌﾟ水やｱｲｽｸﾘｰﾑをすすめた。やがて二人は場所を彼女の宿に移した。『彼女の部屋は、蒸し蒸しして、***日本人の店***で彼女の買ってきた香水の匂いがしていた。』 同 p14 彼女の身からは清らかさがただよっており、やがていつもの快活さを取りもどした。二人は辻馬車でｵﾚｱﾝﾀﾞまで行き、そこで朝をむかえた。『ﾔｰﾙﾀは、朝霧をとおしてかすかに見え、山々の頂きは白い雲がかかって動かない。木の葉はそよともせず、朝蝉が鳴いていた。ｸﾞｰﾛﾌは恍惚となっていた。やがて灯が消えだしたので二人は引き揚げた。そして広場や公園で彼はいきなり女を抱き寄せて熱い接吻をした。そんな息抜き生活を味わっている彼女のもとに夫から手紙が来た。夫は、風邪が悪くなったので帰ってきて欲しいと要請していた。彼女はここで意を決し、急行列車に乗った。停車場で別れる際に、二人はもう会えないねと口にした。

ﾓｽｸﾜは冬だった。一か月もたつと生活は普通に戻った。ｱﾝﾅの面影が記憶の中で消えかかり、今の生活が愚かしい、くだらないものに思えてきた。12月になると彼は妻にはﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞに行ってくると言って、実はS市に出かけていった。ｱﾝﾅにあいたくてなったのだ。一番ﾎﾃﾙに泊ったが、それは彼女の住まいするｽﾀﾛ･ｺﾞﾝﾁｬｰﾙﾅﾔ街に近かった。夫はﾄﾞｲﾂ系で、近所では豪勢な暮らしをしているので有名のようだ。停車場のﾎﾟｽﾀｰに***日本の『芸者(ｹﾞｲｼｬ)』***というｵﾍﾟﾗがかかっているのを思い出し、彼は午前中、劇場に出かけていった。彼女がｵﾍﾟﾗを見にいくのは充分ありうることだという読みもあった。それは図星だった。

彼女は柄付眼鏡を持って3列目にいた、夫同伴で、背が高いが猫背の男だった。その男は幕間に煙草を吸いに出て行った。ｸﾞｰﾛﾌはこの間に彼女の席に行った。彼は無理に笑顔を作りながら「ごきげんよ

う」と言った。彼女は青ざめた。同　p 30一呼吸おいてから、二人は階段の踊り場に出た。彼女は「なんだって、出かけていらしったの？」と言ったときに人の気配が感じられた、急がねばならない。ｱﾝﾅは「わたしのほうがﾓｽｸﾜにまいります」と言って彼の手を握りしめ、それから階段を降りていった。

ｱﾝﾅはそれ以降、二月か三月にいちど、大学の婦人科の先生に診てもらうと言ってﾓｽｸﾜに出かけていった。彼女は、ﾓｽｸﾜのｽﾗｳﾞｧﾔﾝ・ﾊﾞｻﾞｰルという一　　流のﾎﾃﾙにとまり、彼の好きな灰色の服を着て来るのを待った。ｸﾞｰﾛﾌはｸﾞｰﾛﾌで、家族に内緒で、例えば娘を学校に送りがてらそのﾎﾃﾙに行くのだった。二人は部屋で会った。ｱﾝﾅは彼の胸にすがりつき、顔をそらしてﾊﾝｶﾁで目を押さえた。ｸﾞｰﾛﾌの方は、**『この二、三年のうちにひどく老け、ひどく風采が落ちていた。いま彼が両手を置いている肩は温かくて美しい、けれどやがて彼の生命と同じく色あせしぼみはじめるのも、恐らくそう遠いことではあるまい』** 同　p37

『どこがよくって彼女はこれほど彼を慕ってくれるのだろう。---どの女にせよ、彼と結ばれて幸福だった女は一人もいないのだった。時の流れるままに、彼は近づき、契りをむすび、さて別れただけの話で、恋をしたことはただの一度もなかった。ほかのものなら何から何までそろっていたけれど、ただ、恋だけはなかった。』 同p37　それがやっと今になって、頭が白くなりはじめた今になって彼は、**『ちゃんとした本当の恋をしたのである――生まれて初めての恋を。』** 同　p37　のような実感にたどりえたのだった。

二人はいまや、彼に妻があり、彼女には夫がいるのやら、一向に腑に落ちない感覚だった。彼は深いしみじみした同情を彼女になげかけ、自分をなぐさめていた。「それだけ泣いたら、もうたくさん」　二人は長く相談しあっていた。どうやって今の、人目を忍んで、人に嘘をついて、別々の町に住む生活をしなければならないのか、どうしたらこの枷から逃れることができるのか、を考えた。その解決の道が見つかれば、素晴らしい生活が始まるのだという気になっていた。だが、一方で、**『いちばん複雑で困難な道がまだやっと始まったばかりなことを、はっきりと悟るのだった。』** 同　p38

「デミアン」　　ﾍﾙﾏﾝ・ﾍｯｾ　(独)　1919年

少年ｼﾝｸﾚｰﾙは、町のﾗﾃﾝ語学校で3歳年上のｺﾛｰﾏｰから悪の世界に引きこまれそれに悩む日々の中、ある日、転入生ﾏｯｸｽ・ﾃﾞﾐｱﾝと知り合う。ﾃﾞﾐｱﾝは少し不思議な感じの子でその額には傷のような印があって、ﾃﾞﾐｱﾝはそれを特別な“ｶｲﾝの印※”だという。それは一般に人に気味悪がられるが、実は罪業を背負いつつも、神の記憶・祝福にあずかる者、勇気ある人だと話す。

※　旧約聖書に「ｶｲﾝ(兄)とｱﾍﾞﾙ(弟)」の話として登場する。兄弟は、ｱﾀﾞﾑとｲﾌﾞがｴﾃﾞﾝの園を追われた後に生まれたとされている。ｶｲﾝとｱﾍﾞﾙのそれぞれが捧げた供物をﾔﾊｳｪの神が公平に扱わなかったことが原因で、ｶｲﾝはｱﾍﾞﾙに嫉妬し、これを殺害した。神は周囲の人がｶｲﾝに復讐をしないように印をつけた、とされている。聖書の中で、人類最初の罪とされる。*《なお、有島武郎の小説に「ｶｲﾝの末裔」》*

終章で語られることだが、ﾃﾞﾐｱﾝは家に帰って母親に、「ｼﾝｸﾚｰﾙという子の額には、同じ印があった。あの子と友達になれそうだ」と話したそうだ。そしてﾃﾞﾐｱﾝはｸﾛｰﾏｰと話をつけ、ｼﾝｸﾚｰﾙとの関係を断ち切らせた。以後、ｼﾝｸﾚｰﾙとﾃﾞﾘｱﾝは親しくなる。ﾃﾞﾐｱﾝは彼に神の世界と悪魔の世界について話す。彼はよくわからないなりにも、今までの家族という安住の世界の外に、明暗、善悪――――種々の二つの極があることに気づき始める。彼は高等学校に進学。戦争の予感がする中、放蕩と飲酒の日々を送る中、いつしか「自分は何者か、何を維持すべきか」と悩み続ける。あるとき少し年上の気品のある女性を知った。名前が分からなかったので、勝手にﾀﾞﾝﾃの「神曲」に出てくるﾍﾞｱﾄﾘｰﾁｪと呼ぶことに、希望に満ちた日を送るようになる。ある日、彼は彼女の絵を描いた。見つめているうちにその表情がﾃﾞﾐｱﾝに似ている、そしてさらに自分自身でもあるように思えてきた。

あるとき本の間にﾃﾞﾐｱﾝからのﾒｯｾｰｼﾞがあるのに気づいた。それには「卵の殻の中にいるひな鳥はやがて殻(＝それまでの世界)を破って神ｱﾌﾞﾗｸｻｽに向かって飛び立たねばならない」とあった。彼は風変わりな音楽家ﾋﾟｽﾄｰﾘｳｽに“ｱﾌﾞﾗｸｻｽ”について訊いてみたが、満足のいく説明が聞けなかった。彼はこのとき自分にｶｲﾝの印があるように思えた。大学生になった彼はﾃﾞﾐｱﾝの郷里を訪ねた。その実母ｴｳﾞｧ夫人から優しく助言された※。

※　夫人は、「ﾖｰﾛｯﾊﾟをおおう戦争のせいで人の精神はまったく荒廃してしまった。でも新しい理想を切りひらくには前例を求めてはいられない。そのためには、ひなどりのように、古い世界の殻を破り、自分を新しい世界に順応させなければならない。あなたのｶｲﾝの印はそのためにある」と、彼に助言した。

以降、彼は夫人を慕うようになる。折しも彼らの国は戦争に突入した。彼はしだいに、同じ印を持つ者がわかるように、また彼らを求めるようになっていった(「自分の種を守るためにも、“運命に対する準備”をしていこうと思うようになっていった」)。文明的にも精神的にも荒廃しきった社会を見て、ｷﾘｽﾄ教的倫理観の限界を知り、いやがおうにも現実に適応しなければならないと感じる彼がﾃﾞﾐｱﾝに再会したのは、従軍中の野戦病院(馬小屋)のわらの上でだった。短い会話をしただけでﾃﾞﾐｱﾝは去っていった。彼は自分がﾃﾞﾐｱﾝに似てきていると思えた。

森は生きている　サムイル・マルシャーク（露）1946年

《1幕1場》
　今日は12月31日、ある娘が、継母から、明日の新年のお祝いのために、森で粗朶を拾ってくるようにいわれて、それをしていた。彼女が、ｳｻｷﾞとﾘｽが遊んでいるのを見ておかしがり、顔をほころばせたところへ、ある兵士がやっていた。彼もおなじく明日のお祝いのために、家の中の飾りとなﾓﾐの木を伐ろうと探しに森にやってきたのだ。二人は、それぞれの目的のために、協力をし、それが完了したとき、二人は年が改まることについて話をした。そして、それは12月の「月」から1月の「月」にかわるという意味だと、兵士は教えてくれた。それは兵士が、そのおじいさんから教えてもらった話しのようだった。今は、ちょうど12月の「月」と1月の「月」が出会って話をしているんだ、と兵士は話した。娘は、その瞬間、向うの木の下で、二人の白髪のおじいさんが立っていたように思えた。
《1幕2場》
御殿には女王様がいた。女王様といっても、その両親があいついてなくなったあと、女王位についたので、まだ娘だった。その女王様に博士がお勉強をおしえていた。それは書き取りだった。――“草は青々としげり、太陽は輝く。ﾂﾊﾞﾒは春といっしょに我が軒端にくる”――
女王は、こんな書き取りにすぐあきてしまい、博士は手をやいていた。あるとき、女王は総理大臣をよんで、「こんな寒い雪の日はいやじゃ。四月の花ﾏﾂﾕｷｿｳがみたい。 明日のお祝いに、ﾏﾂﾕｷｿｳを持ってきた者には、その籠いっぱいの金貨と銀ｷﾞﾂﾈの裏地のあるｼｭｰﾊﾞをやる」というお触れを出させた。 それで国中が賑やかになりだしたが、誰もがそれは無理だとささやいた。
《1幕3場》
　娘が継母の家に帰ると、そこには、継母とその実の娘（娘にとっては、義理の姉)がいた、二人は、いつもこの義妹を、荒っぽく家事労働につかっていた。二人の母と実の娘は、お触れに言われている内容に興味をおぼえ、そこでちょうど、粗朶拾いの仕事から帰ってきた娘にいって、もう一度森に行ってﾏﾂﾕｷｿｳを、籠いっぱいに摘んでくるようにいいつけた。娘は仕方なく、森にでかけていったが、森は「いつのまにか、吹雪になっていた。松の木の下でうずくまっていると、眠気におそわれてきた。そんなとき、ｵｵｶﾐとｶﾗｽが気を利かせて、松の枝からﾏﾂﾎﾞｯｸﾘを彼女におとし、眠らないようにさせた。ｶﾗｽはｶﾗｽで、ｶｰｶｰと鳴いて、娘を同じく眠らせないようにさせた。

《2幕1場》
　娘は、眠気をはらおうと歩だしたとき、すこし向こうの空き地のところで、火が焚かれているのを見た。そこには大勢の人がいるようだった。近づいてみると、老人3人、中年3人、若者3人、少年3人だった。彼らは娘のために、焚き火の近くに席をあけてくれた。 娘が彼らの話しの内容を聞いていると、どうやら、彼らは各月の「月」だった。 彼らは、娘のことを以前から良く見てしっていた。彼らは、彼女の優しさ、明るさ、森の木々や動物たちを可愛がることを、それぞれ光の中で知っていた、そこで、こんな時期、こんな天気の中、森へなんでやってきたのかとたずねた、娘は正直に答えた。すると4月の「月」が、「しかし、1月、2月、3月を飛び越して4月になることはできないしなあ----」というと、だれからともなく、「それならそれを短く通り過ぎていけばいい」ということになった。
――まず1月の「月」が12月の「月」から氷ついた杖を受け取り、1月の詩(冬将軍はもうたくさん)を、ついで2月の「月」が杖を受け取り、2月の詩（冬の大嵐）を、さらに3月の「月」が杖を受け取り、3月の詩(氷がはじけスズメはさえずり)を、そして、4月の「月」（若者）が杖を受け取り、4月の詩を次のようにうたった。

**『小川よ、走れよ走れ、あっちにも、こっちにも　水たまりよ、消えなさい、 にじんで散って、ｱﾘたちよ　はいだせ　冬のさむさは、いってしまった　森のかれ木をくぐって、ｸﾏはそっとやってくる
小鳥は歌をうたいはじめた。 そして、ﾏﾂﾕｷｿｳの花はひらいた。』**

　この森の中の空き地だけだが、ﾏﾂﾕｷｿｳが地面から顔をのぞかせ、いっせいに咲いた。それはみごとだった。娘はそれに見とれていた。すると4月の精は、「さあ、急がなくっちゃ、4月は1時間しかないんだよ」と、娘を促がした。娘はいっぱいにﾏﾂﾕｷｿｳを摘んで家路に急ごうとした。その時、4月の「月」は、娘を引きとめ、彼女に指輪を贈った。そして「困ったときには、こう言えばいい」と教えてくれた。それは、――

***ころがれ、ころがれ、指輪よ　春のげんかん口へ
夏の軒端へ　秋のたかどのへ　そして冬のじゅうたんの上を、
新しい年のたき火をさして！***

《2幕2場》
　娘がﾏﾂﾕｷｿｳを籠いっぱいに持って帰ったとき、母親とその実の娘らは喜んだ。そして、悪知恵を働かし、より大きな籠を用意し土を底に入れた上で、花をより多く見せた。より多くの金貨をもらうためだった。外からかえってきた娘は疲れていたので、すぐにベッドで眠った。そのとき指時はめている指輪を、実の娘にとられてしまったうえ、指から抜きとられてしまった。

《3幕1場》
　母親と実の娘は、さっそくそのﾏﾂﾕｷｿｳの籠をもって御殿にうかがった。ちょうど、御殿では、新年のお祝いが開かれようとしていていたところで、西の国の大使と東の国の大使らを初め、総理、博士．検事、警護隊長、女官長、庭園師らが麗々しく居並んでいた。そこへ女王がでてきたが、突然、きょうは12月32日だと言い出した。なぜなら、ﾏﾂﾕｷｳｿｳがまだ届いていないから別にめでたいわけではないという理屈だった。これには皆は困った。そこへ例の二人がやってきた。皆はﾏﾂﾕｷｿｳにびっくりした、女王が「それはどこで摘んできたの？」と訊いたが、二人は答えられないでいた。二人は脅され、仕方なくわけを話した。
が、女王の関心は、ﾏﾂﾕｷｿｳだけでなく、ｲﾁｺﾞやきのこやｸﾙﾐなど、いろいろなものに及んでいった。二人は、実際に冬のさなかに森に行ったわけでもないのに、女王の話に合わせているうちに、とんでもないこと、それらｲﾁｺﾞやきのこのありかについてまで、とんでもない作り話をしてしまった。それでそこへ道案内をするよう求められた。ﾏﾂﾕｷｿｳのご褒美としての金貨は、この道案内がすんでからということになってしまった。それどころか、女王の気性からすると、30分以内に道案内ができなければ、首をちょんぎられることになるかもしれないと焦りだした
《3幕2場》
　ずるい母親とその娘の二人は、家にもどって、継子の娘に、ﾏﾂﾕｷｿｳの場所を訊いたが、娘自身も分からないのだ。 ただ、そうでなくても、二人の手前勝手な態度に反発をおぼえた。でも、娘は二人の嘆きに哀れみをおぼえ、例の場所を目指して、向かうことにした。付いて来ないでと言っておいたが、ずるい娘は、あとからこっそりと、木の枝に布で目印をつけながらつけていった(警護隊が追跡しやすいように)。
《4幕1場》
　ずるい娘は、しばらくつけていってから、娘はつけられているのを見破った。 ほどなく、警護隊の兵士たちのほか博士も、総理や、検事も、ずるい母親も、そして何よりも女王までも、そりで追いついてきた。女王だけが行く気になっているが、他の者は行くのがいやになっていた。雪をかきわけ、枝を切り落としながら、寒くて凍えそうだったためだ。
《4幕2場》
　娘は、ずるい母娘に指輪を返してくれといったが、母親は、それは女王様に、召し上げられたと嘘をいったが、それを聞いた女王は、それは嘘だと見破り、あげくうに、ﾏﾂﾕｷｿｳの場所を言わないと指輪を湖に投げこむぞと言って娘を脅した。娘はそれでも言わなかったが、女王がいよいよそれを投げ込んだとき、娘は、12人の「月」から教わった、例の言葉を唱えた。

――ころがれ、ころがれ、指輪よ
***　　春のげんかん口へ　　夏の軒端へ***
***　　秋のたかどのへ　　そして、冬のじゅうたんの上を、***
***　　新しい年のたき火をさして！***

　たちまち、吹雪が起こり、雨が降り大地の雪を払ってしまいそうだった。1月の「月」がﾀﾝﾊﾞﾘﾝを鳴らし、2月の「月」が角笛を吹き、3月の「月」が小鈴を響かせ、4月の「月」からは草笛が聞こえた。すると嵐はだんだんに静まり、日がさしこんできた。春がきたのだ。地面からはﾏﾂﾕｷｿｳだけでなく、きのこやｲﾁｺﾞやｺｹﾓﾓ、それこそ女王が望んでいたものが、顔を見せた。そして、今度は、もっと暑くなり夏になった。そして秋になり、また冬になった。
　だが、地面はまだゆれていた。風が大きく吹いており、女官たちの服の裾をふくらせていた。皆は木につかまりながら、懸命に体を支えていた。そんなときに女王は、あれこれと命令を出し、「命令をきかないと、首をちょん切るわよ」と言いはするものの、誰もそんなことを聞いてはいなかった。 西の国の大使も、東の国の大使も、この場を逃げ出した。そりの馬までいなくなってしまった。もうどうにもならなくなってしまった。女王は、そもそもあんなお触れに署名したことを後悔した。すると博士は女王に、「こんな時は、命令を出すのではなく、頼むのです」と教えた。すると女王は殊勝にうなずいていた。
　そこへどこからともなく、ひとりの老人がやってきた。老人は寒さに難儀しているこの場の人たちに、犬皮のｼｭｰﾊﾞをくれた。そして、今こんな所にいるのかとたずねた。例のずるい母娘だが、だんだんと犬の姿に変わっていった。そして、二人で盛んにもめているように吼えている。
《4幕3場》
　12人の「月」たちが、空き地で焚き火をしている。娘もそこにいる。4月の「月」が、娘に指輪を見つけてきて再び与えた。そして言った、「それ(指輪)をはめていれば、きみはいつでも、あたたかくて、あかるいよ――ふるえるようなさむさにも、ふぶきにも、秋の霧にあっても、四月の月にはだまされやすいといわれているけれど、四月の太陽は、けっしてきみをだましはしないよ。」「また世界にそんなのはないというような、木や花や、木の実や、ﾘﾝｺﾞや、おまえさんの庭になるだろうよ。」
　ｸﾏが大きなつづらを持ってきて、娘がそれを開けると、黒ﾃﾝ、ﾘｽ、ｷﾂﾈのｼｭｰﾊﾞや、銀で縫い取りした服、銀色の靴、などがはいっていた。それらを皆にわけて、また2頭の馬もいて、それをそりにつけた。女王が、そりに乗せて頂戴というと、娘は明るくそれに応えた。森はだんだん明るくなっていった。